

幼稚園教育実習における実習生の幼児理解について

——意識化された具体的な内容の分析から——

栗原 泰子*・野尻 裕子**

About the Young Child Understanding of a Student in Kindergarten Practice Teaching

Yasuko KURIHARA and Yuko NOJIRI

要 旨

平成14年に出された「幼稚園教員の資質向上について」によると、幼稚園教員に求められる専門性が9つ示されている。①幼稚園教員としての資質、②幼児理解・総合的に指導する力、③具体的に保育を構想する力などである。この中で「幼児理解」がとりあげられて論議されている点、今後の幼稚園教員養成の課題を感じる。

本研究においては、幼稚園教育実習において、学生が幼児についてどのような学びをしてきているかを取り上げてその現状と問題点を明らかにすることを目的とした。

その結果、幼児理解に関する学びは、半数の学生が行っており、そこから、指導の重要性についても関連づけているという現状が明らかになった。また、多くの学生は意識が幼児に向かうのではなく、指導の実際に向かっていることも明らかになった。

キーワード：幼児理解 幼稚園教育実習 幼稚園教員養成 意識化

1. 幼稚園教員の資質向上について

平成14(2002)年6月に文部科学省より、「幼稚園教員の資質向上について」¹⁾という調査報告書が出された。この中で幼稚園教員の資質向上の意義として、「幼稚園教員は、幼児を内面から理解した上で、幼児の主体的な活動が確保されるように物的・空間的環境を構成するとと

*教授：幼児教育学

**助教授：幼児教育学

もに、また、幼児の活動を豊かにするための役割が期待されており、幼児教育における中核的な役割を担っている。このため、幼稚園教員に優れた人材を得、また、その資質向上を図ることはきわめて重要である。」と、その重要性を強調している。そして幼稚園教員に求められる専門性として、(1) 幼稚園教員としての資質、(2) 幼児理解・総合的に指導する力、(3) 具体的に保育を構想する力、(4) 得意分野の育成、教員集団の一員としての協働性、(5) 特別な教育配慮を要する幼児に対応する力、(6) 小学校や保育所との連携を推進する力、(7) 保護者及び地域社会との関係を構築する力、(8) 園長など管理職が発揮するリーダーシップ、(9) 人権に対する理解の9つの項目が提言されている。これらのうち(8)を除く8項目は、幼稚園教員を養成する機関において、学生に身につけさせることが求められているものである。

(2)の「幼児理解・総合的に指導する力」については、「幼児は自発的な活動である遊びを通じて、心身全体を働かせ、さまざまなことを経験しつつ、理解力、言語表現能力、運動能力、思考力、社会性、道徳性などの多様な能力や性質について、相互に関連させながら総合的な発達を遂げるものである。このような幼児の発達段階や発達過程を、その内面から理解し、生活の中で幼児が示す発見の喜びや達成感を共感をもって受け入れる、といった幼児理解が、基本として重要である。そして、幼児の総合的な発達を促すため、主体性を引き出しつつ、遊びを通じて総合的に指導する力が、専門性として求められており、幼児期の特性に応じて指導する力として重要である。」と解説されている。

この幼稚園教員に求められる専門性の養成段階における課題としては、「(1) 養成段階における基本的視点」として、「幼児の総合的な発達を促すため、幼児理解に基づき、遊びを通じて総合的に指導するという幼稚園教員の基盤的な専門性を養成することがまず取り組むべき重要なことである。その際、教員が具体的に保育を構想し、実践する力の基盤を形成することが求められる。」としている。

保育の実際を考えてみると、幼児を理解することがその基盤になれば保育活動を展開することはできない。つまり、幼児を理解することなしに指導計画の立案も指導の実際も適切に行われることはないのである。文部科学省が幼稚園教員の専門性としてこの「幼児理解」を打ち出した点、教員養成においてもこの点が重視されるべき課題であると考えられる。そして、幼稚園教員養成において学生が現場の実践を学ぶ機会が教育実習であるとするならば、教育実習においてもこの課題が学生たちに学ばれる機会となる必要があると考える。

そこで、本研究においては、幼稚園教育実習において、学生が幼児についてどのような学びをしてきているのか、どのような内容を意識化してきているのかをとりあげて研究することとする。

2. 研究目的

本研究においては、学生が幼稚園の教育実習体験の中で幼児理解をどのように意識化しているかを分析することを通して、その現状と問題点を明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

本学においては3年次2月と4年次の6月にそれぞれ幼稚園教育実習を実施している。本研究においては、2回目の教育実習(2004年6月1日から6月7日まで)が終了したあとの学生の意識を明らかにするために、実習終了直後にレポートを課した。

(1) レポートのテーマ

「幼稚園教育実習における私の学びについて」

内容・量は自由

(2) 対象学生

K大学教育学部幼児教育学科

4年生 73名

(3) 実施期日

6月22日(火)事後指導時回収

4. 結果及び考察

(1) レポートの記述内容の全体的傾向

<分析の手順>

学生が提出したレポートの文章を1つずつに分割し、そこに何が書かれている内容をキーワードで表し、それらをKJ法により分類していく。幼稚園の教育実習において学生が学ぶであろうと予想される事柄について、それらのキーワードをまとめていく。それを<表1>にあるように5つに分類した。

同じ項目で重複している内容については、1つとし、いくつかの項目についての記述はそれぞれの項目でカウントした。その結果が以下の通りである。

4年次の教育実習ということもあり、責任実習をほとんどの学生が行っている。実際に子どもの前に立って、半日あるいは1日、保育者として保育をするという活動は、実習生にとって

表1 記述内容の項目別割合

項目	N	%
① 自分自身の保育の実際について	52	71.2
② 幼児理解について	33	45.2
③ 指導案, 日誌の書き方について	11	12.3
④ 教師の仕事について	35	47.9
⑤ 自分自身について	19	26.0

非常にインパクトの強い体験である。したがって、このレポートの記述にも、このことが影響し、「①実際の保育について」の記述を全体の71.2%の学生が行っていたという結果となったものと考えられる。ついで、「④教師の仕事について」の記述が全体の47.9%となっている。これも自分自身が実際に保育をすることで、身近なモデルとしての幼稚園教師を意識し、それを自分自身に投影することによって意識化されていったものと考えられる。これらに続いて「②幼児理解について」が全体の45.2%の学生の記述が見られた。ついで「⑤自分自身について」が26.0%、「④指導案, 日誌の書き方について」が12.3%となっている。

分類された項目は、保育を構成している要素であり、互いに関連し合っているものである。それでも学生の意識が保育の実際へ向かっているということは、幼稚園における教育実習体験の中で、実際に子どもの前で話をしたり、活動を援助するという学生にとっての緊張場面から得られるインパクト体験が大きな影響を及ぼしているものと思われる。先に述べたように、幼児理解は保育を計画したり、援助を考えたり環境を構成する際に、基盤となる重要なものである。半数近くが実習体験から、幼児理解の大切さを意識したことは、効果的な実習へとつながるものとして期待できるものであるが、反面、半数以上の学生が幼児理解への意識化がみられなかった点、今後の課題となるものであろう。

(2) 幼児理解に関する記述内容について

幼児理解に関する記述は全体の45.2%、33名の学生のレポートにみられた。記述内容はどのようなものかを詳しくみていくことにする。分析にあたっては、文章の中に含まれている質的な表現に着目し、項目ごとに分類を行った。幼児に関する記述を中心にみていくことになるので、その記述と関連して出てきているものも合わせて考察していくこととする。

① 幼児に関する記述

表2 幼児に関する記述内容

項目	N	%
個性・性格	15	26.3
個人差	12	21.1
発達	10	17.5
遊び	8	14.0
エピソード	6	10.5
思いやり	4	7.0
子供の学び	2	3.5
合計	57	99.9

幼児そのものに着目した記述は全体で57抽出された。具体的な記述内容をみると、幼児の個性や性格あるいは個人差に着目したものが、全体の64.9%を占めていた。3年次、4年次の実習を行うにあたって、まず幼児との出会いがあり、その幼児たちと接する経験から、さまざまな幼児がいるということを実感し、そこからそれぞれの子どもの個性や性格、あるいは個人差というような個々の幼児への実習生の意識化の方向性がみられることになるのであろう。幼稚園教育実習では、個々の子どもの把握から始めて、遊びのグループなどの小集団の把握、そしてクラス全体の幼児の把握と進んでいくことが一般的である。今回の結果からも個々の幼児の理解へと学生の意識が向かっていることは、その後の指導計画の立案や指導の実際、その後の反省などの一連の保育の流れを体験していく上で欠くことのできないものである。ここでの記述は学生自身が保育を担当したクラスの幼児について1人1人に着目した記述であり、実際の保育を担当することで、幼児1人1人が見えてきたことからこのような結果になったと考えられる。このうち6名の学生がさらに細かなエピソードを記述しており、保育を行うにあたって、1人1人の幼児に着目することの大切さと、指導を試みた結果、幼児の個人差の大きさに気づき、ここから幼児個々への理解が意識化されていた実態を読みとることができる。

発達についての記述は、年齢による発達の違いを体験した学生（3、4、5歳児それぞれのクラスに担当）の記述や自由に遊ぶ場面で、各学年の幼児と一緒に遊んでいる様子などの記述に現れている。同じクラスに在籍していても、幼児は誕生月によって個人差が大きく現れている。それが学年が異なると、その違いはより大きなものとなり、学生にも発達の違いとして理解されることになるのである。実際に年齢の違う幼児を見ることで発達の違いに着目した記述内容

となったものと思われる。

先に述べたように、教育実習における幼児理解は、個からグループ、クラスへと広がっていくことによって、指導の理解や実際の指導へとつながっていくものである。今回の結果から、学生は個々の幼児へと向かう意識化の方向性をもちながら、発達の違いへの学びもみられたと言える。

また、少数ではあるが、「遊び」や「思いやり」「子どもの学び」など多岐にわたる幼児理解がなされていることも明らかになった。

② 幼児への対応に関する記述

表3 幼児への対応に関する記述内容

項目	N	%
言葉かけ	13	46.4
個別の対応	13	46.4
全体把握の必要性	2	7.1
合計	2	99.9

①の幼児に関する記述に関連する形で記述された内容である。＜表1＞であげた自分自身の保育の実際の中でも多く挙げられていたことであるが、言葉かけや個別の対応の重要性を感じている記述がほとんどであった。幼児理解をした上での幼児への対応についての記述がある点、学生は実習体験の中で幼児理解から指導の実際へというつながりを意識化していることがここから伺える。

学生の意識が幼児への対応へ向かった要因としては、まず第1に実際に自分が幼児の前に立って、活動を指導したという経験が考えられる。クラス全体に話をしたり、活動を援助する際にそれがうまくいかなかったり、失敗したという経験からこれらのことの重要性を意識したということである。また第2に、幼稚園教師の幼児に対する指導を見ることによって、それがうまく流れていく様子を目の当たりにして、幼児への対応の重要性を意識したということも考えられる。どちらにしても、クラス単位で幼児の活動を援助していくことは、プロの幼稚園教師にとっても大変なことであり、それが実習生の段階では、失敗することへの不安から幼児への対応の重要性を実感したということにつながっているのであろう。

③ 幼児理解の必要性

幼児に関する記述をした学生 33 名のうち、半数に近い 16 名の学生が、幼児理解をすることの必要性を述べている。実際の保育を経験することを通して、幼児理解の必要性を自分自身の学びとして意識化できたということは、教育実習という現場学習の成果として位置づけることが可能である。しかし、今回実習に行った学生の半数がこのような幼児理解へと向かう意識化がなされなかった点、教育実習演習やその他の関連科目において、その視点の提示などを行っていくことで、学生の実習時における意識の方向性をつけていく必要があると思われる。

4. 幼児教育における幼児理解について

幼児教育における幼児理解は、どのようになされるべきであろうか。小川博久は、保育者の資質を構成する要素としての知性を 4 つ挙げている。²⁾ (1) 幼児を理解する力、保育者自身を理解する力、(2) 文化（保育内容）を媒介する力、(4) 文化（保育内容）を表現する力（モデルの役割）の 4 つである。ここで幼児を理解する力をまず第 1 に取り上げて論じている点、その重要な位置づけがうかがえる。彼は幼児理解について次のように述べている。

幼児理解はただ単に保育者の日常感覚で幼児の内面を読むだけではなく、その内面が具体的な行動の中で、どう具体化し、実現していくのか、はたして成功可能な課題かどうか、を見きわめなくてはならない。こうした能力は自然に身につくものではなく、努力して身に付けるものである¹⁾。

幼児理解は直観的になされていくものと思われていた時代があった。それが保育者の資質であるという一般化がなされていた。したがって経験によってそれは形成される、経験知であるという位置づけがなされていたのである。しかし、それは努力して身に付けるものであると彼は述べている。それが努力して身に付くものであるならば、それまで一般化されていたような、経験によって形成されていくもの、あるいは資質として元々もっているものというような認識から新たな転換がはかれるものであろう。つまり、保育者養成の中で、何らかの形で身につけることが可能になるものとなるのである。そこで実際の保育者が行っている幼児理解とは具体的にどのようなものであろうか。それについて小川氏は、次のように述べている。

保育者は援助者の役割を職業として選んでいる者である。それゆえ、他人の子どもに対

する理解に対し、より確かな理解をもつ必要があるのである。さらに保育者は1人の子どもではなく複数の子どもの相手をしている。そのためともすれば、幼児一人一人の動きを見落としがちにならざるをえない。幼児の内面理解をより確かなものにするためには、幼児一人一人に対する保育者の感性による読みとりをより具体的な幼児の活動理解によってたしかめていかなければならない。

まず保育者という職業とプロとして意識することの必要性が述べられている。そのために自分の相手とする子どもをより確かな理解をすることが必要であるとしている。その理解は一人一人の子どもの理解が必要であるが、クラス全体を把握する必要上、一人一人の子どもの理解が浅くなりがちであるという現状があると言う。そのために一人一人の幼児の理解をすることが必要なのであるが、それには「保育者の感性による読みとり」を、実際の保育の中で確認していくプロセスが必要になってくるのである。

幼児理解にとっては、保育者個々のもつ感性が必要となってくる。これは、どのように形成されていくものなのであろうか。個々の感性はその人が育ってきた体験や環境により形成されていくものである。それが幼児教育を学ぶことによって、より深まったり多様になっていくものであろう。そうだとすると、保育者としての感性を磨くためには、幼児理解に関する視点や観点の置き方をあらかじめ学ぶことによって、教育実習などで実際に子どもと接する中でも形成していくことが可能になるものである。そのヒントとなることについて小川氏は次のように述べている。

そこで自分の幼児に対する主観的な読みとりを仮説として、その仮説が本当かどうか、それが本当ならば、どうしてそうなるのかを探るためには具体的な行動を客観的に読みとっていかなければならない。保育者の保育姿勢の中に、幼児の内面的な状況に対する主観的読みとりを確かめ、幼児の具体的な行動の中で検証していく姿勢を確立しなければならない。こうした資質を養成するためには、保育者自身の姿や幼児の行動について記録をとり、幼児がどこでだれとなにをどうしたかを記録にとどめ、そこから考察によって幼児の内面を明らかにするための訓練が必要である。それゆえ保育記録を取ることは、保育者の幼児理解の力を高めるための方法として不可欠である。

先にのべた保育者の感性を深めていくために、小川氏は「自分の幼児に対する主観的な読みとりを仮説」としてそれを確認していくことが必要であると述べている。そこには主観的な読

みとりと客観的な確認プロセスが必要であるとしている。そのためには記録を取ることが必要であるとし、それが「幼児理解の力を高める方法」であるとしている。

教育実習においては、日々の記録を取ることが実習生にとって不可欠な行動である。教育実習日誌を書くためのメモや、指導計画を立案するための子どもの状態の把握などは、実習生にとってその期間中日々おこなっていることである。それが有効なものとなるためには、その記録の取り方や、そこからなにを客観的な情報として学ぶのかがあらかじめ提示されることが必要となってくるのである。

前述した「幼稚園教員の資質向上について」という報告書にも、幼稚園教員に求められる資質には、いわゆる「不易」と「流行」の部分があるとしている。「不易」とは、いつの時代にも変わらない、幼児を理解し、総合的な指導をするために必要なものであるとしている。幼児理解はまさに「不易」の部分であり、これは時代が変わっても、学生の気質が変わってきても変わらない部分なのである。これが幼児教育の原点となるものである。この点をふまえた実習指導の改善が必要である。

6. まとめ

幼稚園の教育実習では、どうしても日々の保育の実際に実習生の意識が集中してしまう傾向がある。それは学生の記述の中にも具体的なことばがけや援助の仕方についての記述が多くみられることから明らかである。しかし、保育の基盤に幼児理解がなければ、それに続く指導計画の立案や保育の実際、保育の評価や反省などにつながらないということも考えられる。

今回の研究において、私たちが意図したのは、学生が自分の学びを意識化して教育実習を振り返るということであった。上述のように、保育の基盤となる幼児理解に関するものを、教育実習における自己の学びとして記述した学生が全体の半数程度であったという点、当初の予想とは異なっていた。教育実習に関連する科目（例えば「幼稚園教育実習演習」「幼児教育原理」「幼稚園教育課程の研究」「保育の方法と技術」「幼児指導法総論」等）で幼児理解が幼児教育の基礎であるというようなことを理論的に学生に伝えていても、学生たちは、どうしても自分自身が行わなければならない保育の実践の方に意識が向いてしまうのである。これは学生の立場に立つならば、仕方のないことかもしれないが、それでは現場学習としての教育実習における効果的な学びにつながらないことも考えられる。

少子化時代における幼稚園には、多様なニーズに応じていくことも必要となり、また幼稚園教員にも同様に多様な能力が求められてきている。それを個々の学生に、学生の個性や得意分

栗原泰子・野尻裕子

野の形成などを視野に入れながら、今後の指導にあたって考えていかなければならない課題であるとする。

<注>

- 1) 幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書「幼稚園教員の資質向上について―自ら学ぶ幼稚園教員のために―」文部科学省 2002
- 2) 小川博久『21世紀の保育原理』同文書院 2005 pp.188-189